

教育長様

校番 043 日彰館 高等学校長

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校
令和元年度 報告書****1 研究の概要****研究の目標**（※計画書に記載したものを再掲）

田舎主義評価とのめり込む学びを具体化し、学習活動において横断的に実践することで、生徒のメタ認知力を向上させる。

研究内容（※対象、時期、方法を含む）

○総合的な探究（学習）の時間等における「探究的な学習」の充実について

（1）のめりこむ学びの具体化

7月の校内研修で、総合的な学習・探究の時間の学習活動において、どのような状態が「のめりこんでいる状態」なのかを担当学年団で検討し、全体で共有しながら「のめりこむ学び」の定義化を図った。また、8月の校内研修でこの定義を検討し、到達目標のイメージ共有を図った。定義は次のとおり設定した。

長期：学ぶ意義、又は学びの見通しの理解を伴った、主体的な学び

短期：「やってみてみたいから（知的好奇心・達成・挑戦）」という理由を伴った、能動的な学び

（2）課題設定の深化

総合的な探究（学習）の時間の各学年における探究単元において、課題設定を取り上げた授業を対象とし、各学年で研究授業を行った（7月3年生卒業研究、9月2年生異文化比較研究、8月1年生地域探究）。また、8月の校内研修では、研究授業の指導案を基に探究のプロセスを共有し、研究授業の内容を振り返り、より効果的な学習展開を考察した。

（3）総合的な探究（学習）の時間と各教科での学習・特別活動との関連付け

11月に、研究テーマを「内発的学習意欲を引き出す授業づくり～資質・能力ルーブリックの活用を通して～」と設定して、数学科の公開研究授業を行った。総合的な探究（学習）の時間で取り上げている「のめりこむ学び」を意識することと資質能力ルーブリックを振り返りシートとして活用することで、探究学習と教科学習を関連付けた。また、1学年の地域探究と11月の国際交流行事吉舎おもてなしプランを連動させているが、この行事に関連した内容を取り上げた授業を各教科で行った。

（4）各学年をつなげる全学年合同授業

7月と12月に全校生徒対象の全学年合同の総合的な探究（学習）の時間を行い、縦のつながりを図った。7月には、昨年度の探究学習の成果と課題を上位学年が下位学年に伝えた。また、12月には、1年間の探究学習を中心とした3年間の学びの振り返りを、3年生が1・2年生に希望進路別グループに分かれて伝えた。各学年内でも発表会を行っているが、他学年にアウトプットする機会を設定することで内容の深化を図った。

○資質・能力の評価について

（1）評価ルーブリックの具体化と焦点化

評価ルーブリックのそれぞれの項目を、学習内容と生徒の実態に合わせて行動レベルに具体化し、生徒にとってわかりやすい、教員にとっても評価しやすいルーブリックにした。また、身に付けさせたい資質・能力を3つ設定しているが、学習内容・活動によってどれを評価の規準とするのか焦点化することで、指導と評価の一体化を図った。

（2）資質能力ルーブリックを活用した評価活動

7月と12月の全校合同の総合的な探究（学習）の時間、7～9月の各学年での総合的な探究（学習）の時間の研究授業、11月の数学科の公開研究授業、11月の相互授業参観週間の各教科での研究授業でこの評価ルーブリックを振り返りシートとして活用した。また、生徒がルーブリックで振り返りをしたものに対して、教員が記述でフィードバックを与えた。

（2）本校にとっての評価の定義付け

研究授業等で蓄積した記述でのフィードバックのデータと対話的な研修を通して、本校にとっての良い評価とは

どのような要素を含んだものかを校内研修で共有しながら、次のとおり定義化を図った。

- ・「田舎主義」の建学の精神に基づく、一人一人をよく見た、それぞれの物語を大切にしたいプロセス評価
- ・生徒が評価されて（又は自己評価をして）、自己を振り返り、さらなる成長に向けた今後の展望を考えることができるフィードバック
- ・評価は教員と生徒のやりとりを生み出すツール → その後を大切にできる指導

今年度の成果と課題

成果

(1) 指導者の実感より

- ・1学年 学習の最初に生徒がイメージした行事にするために、主体的に情報収集、英語でのテキスト作成、発表・案内練習、行事の準備をする姿が多く見られた。英語を学ぶ意義を再認識し、英語学習への動機が高まった。
- ・2学年 仮説を立て、台湾研修旅行を検証と情報収集の場に設定したが、現地で自分のテーマを意識しながら観光をする姿が多く見られた。研修旅行後の整理・分析の際に、体験した異文化の背景を追究する生徒が増えた。
- ・3学年 課題設定の深化を図ったことにより、具体性、オリジナリティを伴った研究テーマが増えた。また、研究内容が自身のキャリアに関するもので、学びの真正性が増し、主体的に情報を収集する生徒が増えた。研究発表の際に、自信をもって語る生徒が増えたことが、進学実績の向上に起因した。

(2) 総合的な学習・探究の時間 授業評価アンケート (12月) より

「総合的な学習・探究の時間の研究に、のめり込むように主体的に取り組んだと思う。」の肯定的回答の割合は次の通りで、昨年度と比較して向上している。

今年度1学年：86% (昨年度1学年：79%)

今年度2学年：84% (昨年度2学年：84%)

今年度3学年：85% (昨年度3学年：66%)

課題

(1) 長期的に「のめり込む」学びの展開

「学ぶ意義、または学びの見通しの理解を伴った、主体的な学び」はそれぞれの活動時には見られたが、3年間を通しての継続性は不十分である。全体計画とカリキュラムマップ等で3年間の学びの意義を共有しながら、教科と探究学習のサイクルで学びの質的向上を図っていく。

(2) 計画的な評価活動の展開

どのようなことができればメタ認知力が向上しているのか、具体化していく必要がある。評価の本質を踏まえて他者・自己評価を適切に行えるような評価計画を作成し、生徒の評価する力の向上を図る。

(3) 資質能力の向上

年度末に行った資質能力ルーブリックのアンケート結果から、資質能力が向上している生徒も多い一方で、下がっている生徒も多くいた。資質能力の向上を目標として、対象学年と対象の資質能力、評価方法を検討していく必要がある。

次年度の目標及び取組内容

目標

探究的な学習の指導と評価の一体化によって、生徒のメタ認知力を向上させる。メタ認知力を、自己の学びを客観的に振り返り、自己の成長を実感し、さらなる成長への課題を見付けることができる力と設定する。

取組内容

(1) 各教科における、資質能力ルーブリックを活用した単元指導計画と研究授業の実施

教科グループで教材研究をし、単元指導計画と研究授業の指導案を作成する。その指導案を学年団で検討した後に研究授業を実施する。全教員でその授業を参観する際に、資質能力ルーブリックを活用して生徒の活動を評価する。総合的な探究（学習）の時間と教科のつながりを深めると同時に、生徒の自己評価と参観した教員の評価のズレを取り上げながら、教員と生徒双方の評価する力の向上を図る。

(2) 生徒の評価する力の向上を目的とした、評価計画の作成と実行

何年生のどの活動はどの資質能力に焦点を当て、どのように評価をしていくか、評価計画を立てることで、3年間を通して資質能力の計画的な向上を図る。